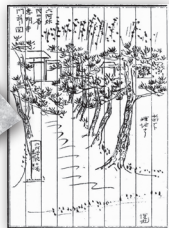
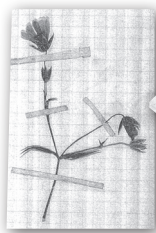


庭の荷風の庭



荷風の文芸空間に“理系感覚”という
一本の補助線を引いてみる

訪問者 坂崎 重盛

土手ゆけば夏草の汁日和下駄 ㊦

まずは楽屋断でごめんなさい。

この連載がスタートするきっかけは、世によくあるごとく、編集部の上氏の提案、「荷風の庭」ではどう？という言葉によって現実となった。

こちらとしては、いろいろ、あれこれ、考えあぐんでいたものの、タイトルが定まらずに連載なんか始められない。そんな気持ちになれない。そんなときに、雑談のなかから上さんの「荷風の庭」では？という言葉で、雲が晴れた。

上さんのアイデアに乗っかって、それに「庭の荷風」と付け足した。

庭は「ば」とも読み、単に庭にとどまらず空間を示す。荷風研究の一級資料の著者、秋庭太郎（あえて氏を略す）は、アキバ姓。饗庭のアイバも同様。このことは連載の序で記したようなおぼえが。

それというのも、永井荷風という作家にふればふれるほど、もちろん、世評の「不世出の文芸の人」という評価だけではなく、ぼくかなりの視点から、もう少し別な角度、アングルというか偏光というか、この連

ラリスト」ではなかったか。

前号の巻末の、

「観察、調査、実行（実験）、そして記録——しかも可能な限りのバリエーションを採集する」

は「理系」でもあるし、「民俗学的」でもあるし「文化人類学的」でもあるが、永井荷風は、もちろん、根っからの文芸の人に他ならないが、その背骨に「ナチュラリスト」の感覚があったのではないか。

そして、その対象がたとえば、なんでそこまで？という、女性との交歓であったり、かの『日和下駄』における「淫祠」「樹」「路地」「崖」であったり、また庭や空地や、道端の樹々や草花であったりしたのではないだろうか。

そうでした！ 忘れぬうちに、その庭や樹や草花、貴重な荷風俳句を（ぼくの勝手な選で）既出の句も含めて、ざっと紹介しておきたい。うるさいようだが、句中の草木、庭園連には「」をつけた（句の下の英文字と数字は「元号と年」）。

「秋草」やむかしの人の足の跡（T14）

載の、当初のサブタイトルとして「したたかな「理系感覚」を持つ」という言葉を添えたい思いがあったのである。

本当のことを言えば、「文系」とか「理系」とか、あまり意味はない区分けだろう。自分の経験でもあるが、これは受験科目の違いにすぎない。

ぼくは、ぼくかなりの理由があつて、いわゆる理系を受験して、その系統の学部に入ったが、いまだにパソコンはじめデジタルが超苦手で、この原稿も神楽坂下の山田紙店（惜しくもしばらく前に閉店）の原稿用紙にマス目を埋めてゆく手書きで、編集部にも多大な迷惑をおかけしている。

話は荷風だ。

これまで「理系」というキーワードを、かなり強引に、手形の裏書きとして、荷風の文芸世界を楽しもうと目論んできたわけで、また、それを証明するような材料を、あれこれを提示、というより（気持ちとしては）展示してきたのだが、ここに至って、自分自身の腑に落ちるキーワードが、ふと浮かんでくれました。普通の言葉だ。

「理系」とともに、荷風にふさわしい言葉は「ナチュ